

タイ国コンケン県コミュニティ森林再生のための青少年育成プロジェクト コード番号 11-A-211

最終報告書

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン
助成期間平成 23 年 11 月 1 日ー平成 24 年 11 月 1 日

◆活動の背景

本プロジェクトの実施地域であるタイ国東北地方の森林は、文化的にも経済的にも生活に重要な資源だった。森林は、動植物などの食糧、薪や建築材などの生活資材を提供するだけでなく、信仰の対象である守護霊が住む場所として、森の祠を中心に村落コミュニティは強固な紐帯を保持していた。しかし 1980 年代以降、人口増加による開墾や商業目的の伐採がすすみ、森林面積は急速に減少した。しかし今でもなお衰退した共有林では、地域住民がキノコや薬草を採って生活の糧としており、今後森林の保護と適正な利用が必要となっている。そのため、自然資源の重要さや社会の共有財産としての公共財概念の教育を子どもの頃から始める必要がある。

◆活動の目的

このプロジェクトの目的は、①地域の子どもたちに自分たちのコミュニティ資源の重要性に気づかせ、森林を公共の財産として守り育てるという行為を通じて学ぶプロセスを築き、次世代のリーダーを育成すること、②大人たちが森林再生に向かうための重要な要因として、子どもを決定プロセスに参加させること、③コミュニティの大人と子どもを含めた形で公共財である森林利用のルールを定めて、森林の適正な利用を進め、コミュニティ自身が森林を守るメカニズムを築くことである。

◆活動の内容と方法

当法人と連携団体であるタイ国カムクーンカムペーン財団（以下、KK 財団）が地域の学校、村人や子どもたちと協働して本事業を行う。

KK 財団では、当該地域において、これまで出稼ぎなどで親に育てられていない貧困家庭の子どもたちが健全に育成できるように、地域の学校と協力し、奨学金制度を始め、伝統音楽・踊りの継承などの活動を行ってきた。しかし子ども個人に対する支援には限界があると考えた。子どもはコミュニティの重要な構成員である。子どもたちが健全に成長し、将来地域に貢献できる人材となるためには、地域の再生を図らなければならない。そして当該地域の再生とは、森林の再生と深く結びついている。

このように考え、KK 財団と当法人は、子どもたちを中心として地域の大人も巻き込んだ

形の地域再生を目指し、森林の知識を伝授するとともに、森林再生を図る管理・保全活動に子どもたちを参加させ、将来地域のリーダーとして育つような青少年育成プロジェクトを立案した。

○対象

本事業の対象は、タイ国コンケン県ムアン郡サワティー行政区内に位置するノーンタカイ・ノーンメック村小・中学校に通う子どもたちである。彼らは、同行政区内の4ヶ村（ノーンタカイ村、ノーンメック村、ムアンポー村、コークラーム村）に分散して居住している。

また保護・保全対象とする森林とは、ムアンポー村のバックソム森（約40万㎡）とノーンメック村公共林（約28万8000㎡）のことであり、お互いに隣接している。どちらも村の公共地で、それぞれの村が管理責任を持つ。上記の4ヶ村の住民はどの森にも自由に入ってよく、動植物を採ることができるが、農地として利用することはできない。

つまりこのような森を中心として、4ヶ村の住民が利益を共有する緩やかなコミュニティを形成している。

本事業では、ノーンタカイ・ノーンメック村小・中学校の子どもたちが、近くの公共林から自然を学び、村の大人たちと一緒に衰退したノーンメック村公共林の一部に植林をすることに重点を置いた活動を行った。

活動は、以下の5段階に分けることができる。

(1)「調査・学習」年齢の異なる子どもたちが、森の伝統的知識や生態をよく知る村の長老たちとともに、村の公共林に入り、キノコ、昆虫、動物、薬草などを収集し記録する。そしてそれぞれの効能や食に値するかどうかを長老たちから学ぶ。このような活動を通じて、森林を身近なものとして認識することができ、自分たちの地域にある自然資源をよく知ることができる。

(2)「キャンプ」近くの国立公園で泊まりがけのキャンプを行い、ネイチャーゲームなどの活動を通じて、森林を体感しながら環境教育の専門家に自然についての指導を受ける。また一緒にキャンプをすることで、同じ地域に住むがこれまで交流が密でなかった年齢が異なる子どもたちが親密になることができる。

(3)「視察」地域にある森だけではなく、他の地域の森林の管理状況をキャンプに参加した子どもたちと村の大人たちが一緒に見に行き、自分たちの地域の森林保護活動の参考とする。

(4)「植林と森林維持」子どもたちが中心になって、雨季が始まる頃から苗木を育てて、村人たちと一緒に村の共有林の一部に植える。その後、住民や子どもたちが継続的に森の状態を見回り、苗木の世話をする。

(5)「ワークショップ」最終的に、子どもたちが森で何を発見したのかを、大人たちの前で発表し、これまでの活動経過と現状を報告し、今後の活動について考える。

◆活動の実施経過

東北タイの気候は、5月から10月頃までが雨季、11月から4月までは乾季で、その中でも12月から1月は冬（日本の秋ぐらいの気温）、2月から5月までは真夏にあたる。そのため植林は雨季に、キャンプは冬に実施した。

またタイの学校は、新学期が5月から始まり、3月に終わる。3月中旬から4月は、気温も高く（東北タイではしばしば40度を超える）長い夏休みに入るため、学校の協力を得て子どもたちとの活動を行うことはできなかった。

その結果、「調査・学習」は2つの森で4回、乾季と雨季の両方で実施し、「キャンプ」は冬に2回、乾季に「視察」を1回、雨季に2回「植林・森林維持」活動を実施した。最後に「ワークショップ」を行い、1年の活動を終えた。

2011年

11月11日「調査・学習」バックソム森 参加者130人

ノーンタカイ・ノーンメック小・中学校と協働で、小学4-6年生、中学1-3年生が、バックソム森に入り、どのような資源が利用できるか調べるために、キノコなどの食材について調査した。すでに学校でグループごとに、森のキノコについて予習し、キノコの名前を書いたボードを用意していた子どもたちは、森に詳しい村人たちの先導で森林の中に入り、見つけたキノコを採集した。子どもたちは、キノコの名前を大人に確かめ、ボードに張ったり書きつけて、食べることができるかどうか、どのように調理すればいいのかなどを熱心に聞いていた。グループは、年齢が異なる中学生と小学生を一緒にし、年長者は枝やとげなどに気をつけ、年少者を引率した。また現地の団体スタッフだけでなく、同校出身者で大学に通う学生や高校生もボランティアとして、年少者の引率や指導を手助けした。

12月13-14日「キャンプ」コンケン県カオスワンクワーン郡国立公園 参加者50人

自然豊かな国立公園内でキャンプをし、ネーチャーゲームなどを行いながら自然と親しんだ。講師として自然農法専門家、環境専門家を呼んで、森について様々なことを学ぶ機会となった。参加者は、ノーンタカイ・ノーンメック小・中学校の中学生有志と、卒業生である高校生で、以前コミュニティ森林であるバックソム森で自然学習をしたことがある子どもたちであった。一緒に泊まることを通じて、これまであまり話すことがなかった地域の子どもたち同士の交流も増した。

年長である高校生は、年下の者がいることで、先輩としての責任感を感じたようで、グループ活動をする際、積極的にまとめ役を買って出てくれた。

2012年

1月12-15日「キャンプ」コラート県カオヤイ国立公園 参加者21人

野生の象やトラが保護されている国立公園で、キャンプを行った。カオヤイ国立公園は敷地も広く、自然保護や人の安全の面から、公園事務所が入出園を厳しく管理している。それで、まず公園入口付近でキャンプし、中 2 日は国立公園の引率ガイドに従い、キャンプ道具を持って森の中に分け入って野営した。最後に、森を出て振り返りを行った。

このキャンプは、野生動物保護団体が全国から子どもたちを集めて、自然のなかで環境教育を行うために実施した企画で、そこにノーントカイ・ノンメック村中学生と高校生も参加した。カオヤイ国立公園周辺県で自然保護活動を行う子どもたちから、全国にいたるまで 300 人以上が集まり、ネイチャーゲームを始め、ドローイング、バードウォッチングなどを専門家について教わり、自然を満喫した。また交流会では、それぞれのグループが自分の地域の文化や芸能を紹介した。初めて他の地方の子どもたちと直接交流することによって、子どもたちは地元の文化の違いを知るとともに、自分たちを相対化する視点を養うことができた。

2月3日「調査・学習」ノーントカイ村コミュニティ森林資源調査 参加者 21人

ノーントカイ村の公共林で、小学生・中学生から関心がある者たちを対象に、利用できる自然資源を調べる活動を行った。参加者は、以前バックソム森での調査やキャンプに参加した経験がある有志の子どもたちで、居住地は 4 ヶ村に分布している。彼らは、学年は違うがお互いによく知りあうようになっており、友人グループが形成されつつある。今回は、彼らが自分たちで、キノコ調査のためにボード、かごなどを準備した。

3月15日「視察」コンケン県カヌアン郡コミュニティ森林視察 参加者 60人

コミュニティ森林保護の成功例である村へ行き、森林の保護・保全、管理、委員会の運営などについて視察した。そこでは、住民による森林保護委員会が設立され、組織運営や森林保護活動も住民たちが自ら行っていた。視察参加者は、ノーントカイ村、ノーントカイ村の中・高校生 30 人と、ノーントカイ村村長を含む村人 30 人である。村の公共林での子どもたちによる自然資源の調査活動に関わり支援してくれていた村人たちに声をかけ、森林保護に関心がある人々が参加した。

5月11-14日「視察」サコンナコン県クットバーク郡コーノイ村子ども会活動視察 参加者 45人

村の子ども会が、社会貢献活動の一環として森を保護する活動をしている村を訪問し、ホームステイをしながら、子ども会活動を視察した。参加者は、ノーントカイ村周辺 4 ヶ村に住む中学生・高校生 30 人と約 10 人の保護者である。コーノイ村ではもともと寺の境内を掃除する子ども会があり、村の行事の手伝いなども子ども会が率先して手伝っていた。そして、村が森深い山岳部にあるため、山火事の危険性が常にあった。子ども会は、森林地域と居住地の境界線を定期的に見回り、枯葉や薪を掃除することで山火事の危険性

を減らす活動をしていた。子ども会は、18歳未満の者なら誰でも入ることができ、高校生を中心に主に小中学生で構成されていた。保護者である大人たちは、子ども会の活動を強制的に管理することはなく、自主性に任せつつ、活動上の相談に応じ、子どもたちを支援していた。このような自主的な子ども会は、他の村や町ではほとんどみられることがなく、ノーンメック村コミュニティ森林やバックソム森とは状況が異なるが、子どもと大人が協力して行う森林保護活動の参考になると考えた。子どもたちによる説明を受けつつ、森林を散策し、子ども会の森林保護活動を見聞し、夜は交流会を通してお互いの村の文化や環境の違いなどを認識しあった。

5月26日「植林・森林維持」ノーンメック村コミュニティ森林の掃除、肥料の注入、植林の準備 参加者 60人

コミュニティの共有地に協働で植林することは、地元の学校、自治体、村人との合意を得たことだった。それでノーンメック村公共林の一部を、村長および村委員会の許可を得て、植樹する土地として整地することになり、小学生・中学生有志を募って、すでに衰退して草むらとなっている共有地の雑草を抜き、肥料等を注入した。耕起については、地元の自治体が独自の予算ですでに耕耘機を入れたあとだった。

8月2日「調査・学習」バック・ソムの森調査 参加者 27人

ノーンメック村コミュニティ森林よりも広いバックソム森で、昨年引き続き自然資源を調査した。小・中学校全体に声をかけて子どもを参加させた昨年と異なり、関心を持つ者に声をかけたところ、すでに森に入ってキノコ採集などの調査を行った経験がある子どもが多かった。そのため、今回は、「動物」「昆虫」「薬草」「樹木」を調査し、その名前と利用方法を学んだ。食べることができるもの、できないもの、食べるとしたらどのように調理するのか、どのような生態や特徴を持つのかを、村の長老とともに森に入り、一緒に採集しながら学習した。

8月18日「植林・森林維持」ノーンメック村共有地での植林 参加者 130人

ノーンタカイ・ノーンメック村小・中学校と協働で、ノーンメック村公共林の一部（約3200 m²）に、植樹した。4ヶ村から子どもたちと村長などの村のリーダーが参加し、フタバガキ、チーク、タマリンドなどの多様な樹木を植えた。苗木は、子どもたちとスタッフが前もって準備し、村の寺院の境内で育てていた。この公共地で植林する活動は、地元の自治体の植林活動の一環でもあったが、調整がうまくいかず、一緒に植樹することはできなかった。しかし植樹した後の苗木への水やりなどは、村と自治体が協力して行うとの合意を得ていた。

9月9日 「調査・学習」ノーンメック村コミュニティ森林資源調査 参加者 27人

ノーンメック村コミュニティ森林で、自然資源調査を行った。地域の森林に関心を持つ子どもたち有志が参加した。彼らは、すでにバックソム森やノーンメック村公共林で、何度か森の資源の調査・学習に参加し、自分たちの地域や森林についてもっと知りたいと考える子どもたちであった。同じ村に住んでいるわけではないが、すでにお互いをよく知り森林やコミュニティの情報を共有する親しい関係に発展した。

10月31日「ワークショップ」ノーンメック村集会所参加者38人

1年間の活動の中で生じた仲のよい子どもたちのグループが集まり、村の大人たちの前で、森林に入って得た知識や感想を披露した。参加者は、約20名の中・高校生と、ノーンメック村公共地に植樹した苗木の水やりや世話をする者、森の伝統的知識を持ち、子どもたちの講師として森の動植物の知識を伝えてくれた者などの大人約18名であった。大人たちは、子どもたちのがんばりに感心するとともに、今後も一緒に地道な植林を続けることを約束した。

◆活動の成果

第一の目的である、地域の子どもたちにコミュニティ資源の重要性に気づかせ、森林保護活動を通じて学ぶプロセスを築き、次世代のリーダーを育成させることについて、一定の成果があがったと考える。

本事業の対象であったノーンタカイ・ノーンメック村小・中学校の生徒とその卒業生が住む周辺村4ヶ村は、キノコなどの食材や薬草などを同じ森林から採集し、利益を共有する地域である。森を共同利用する、緩やかなコミュニティが存在するが、森林管理は行政上、それぞれの村に任せられ、実際に、村を超えて何らかの共同作業を行う機会はこれまでなかったため、森林保護のみならず、地域での活動は村ごとに限られていた。そのため子どもたちも、同じ学校に通っているが異なる村の子どもや年齢の違う子どもとは知り合いであっても、親族でない限り親しくなる機会がなかった。

本事業では、まず学校の理解を得て、コミュニティ森林の自然資源を学ぶ調査・学習を授業の一環とすることによって、多くの子どもたちや教師に森林保護活動の存在を広く知ってもらうことができた。そして参加した多くの子どもたちの中から、環境や森林に興味を持つ子どもたちを選抜することができた。「調査・学習」、「キャンプ」や「視察」を通して、子どもたちは自分たちが住む村を超えて、より広い世界へと視野を広げることができたと同時に、自らのコミュニティや自然環境について客観的に見つめる視点を得ることができたと言える。そして将来、学校を卒業したのち、出稼ぎや学業のために村を離れたとしても、自分たちのルーツを忘れることなく、継続して自分たちのコミュニティの開発や発展に貢献する次世代のリーダーとして成長することが期待できる。

第二の目的である、大人たちが森林再生活動を行う際の決定プロセスに子どもも参加させることについて、一部成果があがったと考える。村の大人たちは、子どもたちが自分たち

のコミュニティ森林にかなり関心があったこと自体に驚いた。最初は、森林の自然資源に対する関心であったものが、子どもたちが大人たちとともに何度も森林に入り、視察や他の村との交流を通して見聞を広め、自分たちが利用するコミュニティ森林の社会経済的側面にも関心を寄せるようになった。例えば、バックソム森を管理するムアンポー村の村落委員会は森の一部を民間に貸出して賃貸料を村の行事などの運営費としていた。借りた者は、公共地の木々を伐採してサトウキビ畑として利益を得ていた。それを見た子どもたちは、コミュニティ森林であるはずの土地にサトウキビを植える人々を見て、怒りをあらわし、その様子を見た大人たちは、違法行為ではないことを説明しつつ、子どもたちの心に森を愛し保護しようという意識が芽生えているのを感じていた。また、植樹した苗木は根がつくまで、誰かが定期的な水やりに行かなければ枯れてしまうが、子どもたちは誰に言われたわけでもなく、コミュニティの公共地の植林を見に行き世話をしたり、現状を村長に報告したりと、積極的に森林保護活動に参加しようとしていた。

このような子どもたちの森林保護活動は、大人たちの意識に刺激を与えたことは確かである。しかし、村によって森林に対する意識が異なり、4ヶ村が協働で森林保護活動をするまで住民の森林保護意識を高めることはできなかった。そのため、子どもたちの積極的な活動を見て、一緒に活動を行うことを喜んで受け入れ、大人の話し合いに子どもを参加させることを許可したのは、ノーンメック村だけである。またノーンメック村でも、子どもの発言を尊重してくれたが、非公式なものであり、決定プロセスにおける子どもの参画が可能となったとは言えない。

第三の目的である、コミュニティの大人と子どもが協働で、コミュニティ森林を守るメカニズムを築くことについては、すでに述べたようにコミュニティ森林から利益を得る4ヶ村が一つのコミュニティとしてまとまることができなかつたため、成功したとは言えない。バックソム森を管理するムアンポー村の村長をはじめとした村のリーダーたちは、森林保護に関心がなく、「視察」に誘っても参加することはなかつた。一方、ノーンメック村公共林を管理するノーンメック村では、村長をはじめ、10~15人ほどの森の伝統的知識を持つ大人たちが関心を示し、自然発生的な森林保護グループを作り、植樹したばかりの苗の水やりなどを交代で行った。

彼らは、行政に登録する公的な森林保護委員会を組織することを望まなかつた。その理由は、自治体の職員を参加させなければならず、なおかつ登記などにお金がかかるためである。地元の自治体との合意では、公共地での植林は自治体の業績となるため、定期的に植林したばかりの土地に水をやる給水車を出してくれるとのことだったが、月に1回ぐらいしか給水車が来なかつたため、ノーンメック村の住民が自主的に水やりなどの世話をし、結果的に非公式な森林保護グループが形成された。

村人たちが決めた公共林利用のルールは、森の木を伐採しない限り、誰でもその産物を利用していいということだった。遠くの村からキノコを大量にとり市場に売る者や、森の中に入ってたき火をする子どももいる。そのような行為はよくないが、他の者や森林に被

害が及ばない限り、強く禁止することはしない。子どもたちに森林の大切さを教えることによって、大人になってから公共財産としての森林を保護することができるという考えを森林保護グループの村人たちは示した。

当初の計画より予算が不足したため(申請 100 万円⇒助成 50 万円)、実施回数や参加者の人数を減らした。また「植林と森林維持」の苗や耕耘、「キャンプ」や「視察」のための交通費なども当法人が負担した。そのため、全体的に規模は縮小したが、逆に子どもたちと密度の濃い関係を築くことができたと考える。

◆今後の課題

一年間の本事業を通じて、小学生から高校生までの子どもたちに、自然資源の重要性や公共財の概念を教えると、真剣に森林保護と適正な利用を考えるようになることがよくわかった。今後も、環境教育を地元の学校と協働で続ける努力をすることによって、自分たちの地域の将来を考える次世代のリーダーを育成することができると思う。

地元の学校、自治体、村のリーダーなどが一体となって、子どもたちとともに森林保護活動を行える基盤づくりをすることが理想だが、現実的に大人の無関心など、様々な問題に直面した。村落の政治に関わるため、村の大人たちを無理に誘うことはせず、子どもたちを対象とした活動に重点をおく方が、将来のコミュニティの森林保護メカニズムを築く契機になるだろうと考える。

今後は、より一層自治体の参加を促し、定期的な植林や森林保護活動につなげると同時に、学校のカリキュラムの一部として、地元の森林の「調査・学習」活動は継続する。また本事業は「森を愛する子どもプロジェクト」として、現地団体であるKK財団に引き継がれ、「キャンプ」や「視察」は適時継続していくことになった。



「調査・学習」 ノーンメック村公共林の中で、キノコの採集。



「視察」 コンケン県カヌアン郡コミュニティ森林視察



「植林」 ノーンメック村公共地での植樹



「キャンプ」 コンケン県カオスワンクワン郡国立公園 ネーチャーゲームの説明



「ワークショップ」 ノーンメック村集会所にて